



重修真書太閤記

十一編

四



門 459 卷 104

消印 福永

重修真書太閤記十一編卷之十

北條家籠城手配の事
并駿河御進發乃事

天正十七年十二月上旬より大軍下向を以てはるへ
是を防ぐ用意とて箱根の山中に新城をとり立
尾崎を要害に取入堀をとり切たり城主は松田右
兵衛大夫康秀なり但し右兵衛大夫小勢がまの
敵を防ぐに力足さばへしとて相列甘繩の城主北
條左衛門大夫氏勝をまへらば寄騎の間に宮豊前
守好高朝倉能登守行方弾正栗本備前守以下あり

后攻 會印

加えたりけふ。猶心元か。と。おのひ。と。みや。明北
へ天正十八年正月廿日池田民部少輔山中大炊助
推津隼人を山中に差のせ。間宮朝倉行方同様入
相守るへ。と。下知しけむ。この不ろ。乃大名衆よ
又五騎の。加勢あり。間宮豊前守好高。小田原
を立けふと。氏政氏直兩朝臣。小暇乞しける。序よ
何様も。忠義を援。中へ。間御心を安ん。給。と。
はへ。と。申て。孫なりけ。彦次郎を。召連たり。間宮
か。座敷を。たちけふを。と。列座の。面々。いひ。と。天
晴大将。や。と。感し。ける。と。ぬ。け。又。小田原の。城。小
々。氏政氏直兩朝臣の。下知。と。と。大手。か。れ。の。宮。城。

野口入。松田尾張入。道父子を。大将。と。て。武。列。松
山の。城主。上。田。上。野。介。朝。廣。下。總。白。井。城。主。原。式。部。大
夫。の。不。ろ。正。木。庄。兵。衛。里。見。の。人。々。上。總。の。方。木。境
大。田。喜。東。金。小。金。相。馬。の。勢。一。万。三。千。餘。ふ。と。あ。を
固。む。同。く。湯。本。口。の。千。葉。の。人。々。竹。の。花。口。の。北。條
陸。奥。守。氏。照。成。田。下。總。守。氏。長。皆。川。山。城。守。廣。照。全。生
上。總。介。一。万。五。千。餘。騎。齋。田。口。の。太。田。十。郎。氏。房。小。峯
ハ。北。條。左。衛。門。佐。氏。忠。早。川。口。の。北。條。右。衛。門。佐。氏。亮
これ。を。守。る。の。不。ろ。北。條。新。三。郎。同。彦。太。郎。伊。勢。備
中。守。同。備。後。守。大。和。兵。部。大。夫。山。前。上。野。介。同。紀。伊。守
同。四。郎。左。衛。門。同。左。近。大。夫。多。目。彦。八。郎。山。中。主。稅。助

福嶋伊賀入道道璿石巻勘解由左衛門南條山城守
同左京大夫同民部同左馬助小西隼人正富永内膳
大藤左衛門尉依田大膳亮荒川豊前守大森甲斐守
清水太郎左衛門尉遠山左衛門尉大尊寺彌九郎安藤
備前守同兵部同彌三兵衛梶原三河守内藤左近大
夫相馬次郎上田常陸介酒井小次郎酒井筑後守芳
賀伊豫守同伯耆守朝倉右京進伊藤右馬助大藤式
部大夫原豊前守荒木兵衛尉羽田佐倉布川長南大
須賀高井内藤大和守小幡小泉小林安中左近大夫
由良信濃守長尾但馬守以下關東勢都合四万余騎
とぞ聞えたり小田原北條五代の間居城入

て随分堅固に構え上富士と小峯に續きたる
山間も三重まゝ堀をめぐり小峯山を城中に入早川
の川をかくとく南の濱邊へ押廻し石垣を築東北
の沼を浚ひ築地をめぐりせいらう矢倉をきよか
く立からべ堀をぬり逆茂木を引たり兵糧ハ累年
み貯えたり玉薬ハか祓くそれくの用意ありたと
ひ日本國の勢貴來りて五年三年攻戦入ともささ
かく落さばへーとハさくさりけり
流布本二十七万余騎入る楯あはれといへり誤
なり廿七万の人数を九百万石の地はあらざれ
ハ出さへらひ

二月十日北條征伐として駿府御發駕加嶋の郷に
御動座十六日伊奈熊藏忠政に仰付られ富士川に
船橋を渡さし廿一日に至り成就したり此日
北畠信雄駿府に到着を三月朔日關白參内したま
ひ北條父子朝憲を忽緒を依て誅罰を加えらるへ
きため節刀を賜ちらんを請申されしかるを
ちち勅許あり毛利右馬頭輝元を聚樂よとめて
京都の鎮護たらしめ關白に從ひ下向の總軍二十
万餘騎とぞ聞えけり八日より大雨をりありと
いへとも事とせし十日三羽吉田に著たまふ伊奈
能藏忠政まちむのへ奉り饗食應に奉る十一日吉田

を發途あるべく催したまふを忠政かく諫め奉
りしかの秀吉ちち笑ひたまひ先陣雨は支えられ
かの後軍涉るを得へうらけと仰られける時
忠政推返し少軍のさもゆへに如斯大軍の溺死多
かるへく覺之ぬと言上りけるを關白深く感した
まひしとあり十九日關白宇都の山を過たまふ時
郷民勝栗を獻しかの馬の沓を奉りしかの秀吉公
大いよ給こいたまひ着したまひし羽織をぬいて
黄金もろへく賜ちりしとなりその日駿府に入御
廿三日清見寺へ御移り廿七日みろ沼津に著たま
ひ廿八日山中の城の邊巡見したまひしより中

久保ふ御らひて城攻の手配り御相談ありて戌刻
沿津の御本陣へ歸御ありて箱根韮山の地圖を召
出されそのくち軍列を定めたまふ小田原口の駿
府の御勢あり韮山へ北畠信雄蜂須賀阿波守家
政福嶋左衛大夫正則長岡越中守忠興蒲生飛彈守
氏郷中川藤兵衛尉秀政森右近大夫忠政戸田民部
少輔等あり山中の寄手の近江中納言秀次中村式
部少輔一氏田中兵部少輔吉政堀尾帶刀先生吉晴
山内對馬守一豊一柳伊豆守直末堀左衛門督秀政
木村常陸介丹羽五郎左衛門長重長谷川藤五郎等
ふれと堀木村丹羽長谷川の城の南へ廻り自餘

の勢の急な城を圍て攻むへと福原右馬助仰を
傳ひて廿九日寅刻より秀次の勢山中へ寄たり
か己の刻をかりて秀吉公秀次卿の備の上なり
山へ御馬を立らば此処の城より猶十餘町を隔て
かと覺えたり今少陣をきくめと仰らる
まは中村式部少輔かまより我陣へかへり
御説の趣いふと申さかは一氏侍渡邊勘
兵衛鳥毛の大半月の指物さして馳向ふ又關白の
旗本小島嶋津兵庫頭大友右兵衛督小早川隆景安
國寺浮田宰相澤井左衛門天野周防守土方勘兵衛
瀧川下總守長曾我部宮内少輔と加藤左馬助の海

賊船を漕廻して伊豆の海より相模乃浦へとせ
むろの東南の濱手入の池田三左衛門尉辰坂中務
大輔黒田官兵衛入道をらめ中國四國畿内の武
士その負をいらは甲乃星をややか一鎧の袖を
はらふる尺地も餘さば陣をとる折しも山郭公の
二聲三聲關白殿の陣屋乃邊み音信しかり關白殿
下
啼立よ北茶山の不とうき
と遊くをれを後み紹巴うけたまうる自然よ
氣あちくたうと感しけるとかや
北陸道の諸將進發の事

弁上杉真田口輪の事

關白殿下の副將軍羽柴筑前守利家嫡子肥前守利
長擲手の大将とて加賀能登越中の兵三萬餘騎
を引率し二月十六日加賀國を立て北陸道を碓氷
峠へ發向をれは越後佐渡の主上杉彈正大弼景勝
をよひ信濃國の毛利河内守真田安房守同源三郎
芦田修理大夫以下を勢加らうけむに都合その勢
六萬餘人碓氷のおあゝ輕井澤沓掛追分の邊を
まかく陣をとほ爰は上杉景勝諸侍を集めて申し
は北國の大將軍を承らうし羽柴筑前守が
我等の關白と元より親しからば今度の勲功よ

又々我等とて關白の心もいかんへたれ北條の滅
 るを我等とて奮て大名のためふりしから
 以然れに面々も能々心して軍したまへや勝ても
 地をままとへる不どの思を難く負たらんふの忽
 地を削らねへし勝んてをまかちみ杯の人への
 らに負まると思ひまらるる合戦を致さへくと下知
 けしに先手も進み藤田能登守信吉相備よ
 佐藤一甫齋日槽備前守黒川相川黒部加志松本竹
 股以下三千八百餘人とかや藤田々組よ夏目軍八
 今年廿二歳武邊の世に許されたりけるを景勝呼
 いぐしその方柴田合戦の時小拔群の軍功あり

るふより軍八と名乗せたるや今度の藤田も手の
 物頭も准して働くへとして五十貫の加増を賜
 り舎人助よ改めたまへに舎人助よことみ感涙肝
 む銘し打立あうら我弥の小頭齋藤孫右衛門尉
 ありはべくいと申てまかち先手も進みゆ又
 信濃國の村上義清の嫡男源五國清この頃勘當
 り引籠りありけるとし呼いごと大手組の頭とか
 都合二万三千餘騎羽柴筑前守を待居たり同廿
 八日筑前守追分も着陣し景勝も對面して軍の手
 配をか三月朝日上杉景勝碓井峠をうちあへ坂
 本陣をとけたり殿下の定めたまふ真田

依田小笠原の信濃國の舊家なり。案内者かしの峠
 の先陣をへしと仰いさされたり。ありはま景勝の
 先陣藤田能登守か承て真田と意趣あるをりつゝ
 上田の城下へはしりやうらひの必定真田めり計策を
 以て行軍をさまたぐはからん。真田は智略あるは
 我もすく軍法をしり。夏目舍人助いりみ心得の
 ろやと呼くは人の舎人うけたまはり。其先陣仕るへ
 一とく三百餘人を引率し上田の城下へはしりやう
 能登守の戸石みかへひそかひ。輕井澤の東をさ
 して押たりけり。これの真田去る天正十年上田合
 戦の時より景勝と不快ありけるを以て今度越後

勢城下と通行あり。斯々せよと二男の與三郎幸
 村小言舎しり。其故の安房守爰みあり。長け
 か源三郎の嫡男なり。行末のためあり。かるへし
 與三郎の次男あり。いつとま向てもよか。はへしと
 昌幸のちかりなり。夏目舍人助の上杉勢の先
 陣として上田の町みさしり。は町の入口み。鹿
 落を結る人を通す。その眼に細く新道あり。舍人
 助足輕み下知し。やらを引破る。人数を。か
 くれの真田の家臣大塚伴三郎馳せり。おの狼藉
 なり。外に道ふくは。尤やうかる振舞を。か。たま
 みへし。是より右千曲川み。そひて軍勢通行の道を

六月己未編末一

むらりては、我れは御あり、又はへへといへる舎人
助新道を開かど、いこの存知てはへとも、越後勢の
からひ、左右中と三の、その中、小虎落を結て、右を
明し、敵をまの作法と昔人乃口傳、よ上田の町
の真中、よやらぬを嚴しく、おひたまひ、右をあけ、川
みまひたる細道を一定、我等を敵と見たまひ、軍を
持たる備立、はまは、真田殿へ、北條方、一味して
我等を止め、結構と合点して、はへ、をか、と、試
み、やらぬを引せて、は、あ、は、み、御邊の御挨拶
川邊の道を押へ、城下、い、さ、ら、よ、通、を、ま、と、以て
の、不、ろ、か、る、御口狀、その意を得、いと申、ま、ら、は、真田

與三郎幸村、穴山小左衛門、望月宇右衛門、伊勢崎藤
右衛門、海野六郎兵衛、百餘人、い、ご、ま、ら、り、與三郎、真
前、み、ま、く、く、い、ろ、よ、越後の先手衆、真田の、ま、の、ろ、北
條方、み、か、り、ひ、る、と、い、何を證據、み、申、さ、れ、は、ま、や、楚
忽、の、と、ち、い、ひ、た、ま、い、か、越後、ま、は、く、え、上杉、一
家の軍法、ま、た、や、ら、み、ゆ、ゆ、へ、信濃侍、ハ、片意地、よ
して、軍法の軍略、の、と、い、ふ、と、い、い、や、ら、は、只敵、よ
向へ、ハ、ま、く、む、と、知、く、退、く、と、ね、一旦、約、せ、詞、ハ
金鉄、更、よ、變、替、せ、と、ね、城下、を、通、行、た、ま、ま、ん、と
から、ハ、通、行、ま、い、ら、ま、と、へ、然、あ、り、城下、よ、普請、の
ハ、み、よ、り、態、と、虎落、を、お、ひ、て、大軍、を、と、め、と、を、尤

やらよ疑ひたすみからば心のまゝも通行たよへ
 といひけるみより舎人助左承子にへ何とて推
 て通行仕へをけりあきら申かゝりてはへ我等
 只一人鎗持一人みゝ御城下を罷とをり人数を
 新道より通し申へいと式代しけるみより幸村も
 心みくき舎人めり言状かかとの思へとも又お
 かへ以へを詞もかけせの市らの御通りはへと虎
 落をおけて舎人をま孫く舎人まゝろえ鎗持一人
 百具し上田の城下へせやくは幸村主従町の
 からひみ列を立て舎人跡み法をそひたり上田
 の町を半も過りらんとおのゝ処は新敷土を掘て

築上たる所あり舎人あやも普請所といひあ
 るへ如何なるをを為たりけんと思ひ立止
 與二郎幸村をまおけいゝみ真田殿をみい
 へ普請所といひ爰か多へ一樋を伏たるうお
 穴何とよみゆやと問ふかハ與三郎幸村それハ
 陥穴よみぬる近頃山手より夜々猪の荒てはみよ
 更上よ上止の落るやうみかまへくは爰を加やう
 入御踏ひへと申て幸村真先は渡りかハ舎人助
 鎗の石突みゝ能くあゝりを突あらためらんと聲
 かけ只一列は二間をかりを飛越たり幸村案は相
 違し嗚呼飛たりよく列たり北國無雙の勇士らか

名字を承るゆを、やと申けるみより名乗ゆと
りよも御存知ゆま、是ハ藤田能登守組夏目
舎人助と申ゆのみゆといハ幸村や、夏目殿と
ハ御邊のとり天晴日本一の弓取をかようせハ
大事の人を誤ハへりけり心みかかけたまひそ
と互ハ會釈して分れけふ凡その道五六町も過
ぬらんおゆハとき砥石の方ハ何たりて鉄炮の音
をけり聞えけるみより真田幸村何とみやと只
一騎山手をさして馳出しお世を足敷み凡三四万
の人数整々と押通りけるその影ハをりみとや廿
餘町をへてたハ詮方好く牙を咬め引返し

いふ侍とらあハ勢ハ誰かるかたハみ見て參
まといと出りかいとやうをの若者どハ六七騎と
せいど、在家のそのを呼出し是をさけり越後の
人数とおぶりハへどハ旗さしそのをかくし忍
び通らぬ間誰彼と申てハ定かみ知中さハ但し
多勢の中ハ紛れてまがれハ勢の高き人の竹の杖
突たふり竹ハ雀の紋付たる小袖をへひし若
くハ景勝みやと申たり幸村躍り上りたをかられ
しハ残念や口惜やといふ不どみ千曲川の川添か
る在家ハ焼亡ありと立ささくみより與三郎幸村
人数を引はれ馳付てこれを見はみ火勢さかり

燒募る真田のめの共々を集り之れを防を漸々
して消止ぬのち入聞の藤田の勢のうちより足輕
手過ちしたるよそ有けると形

重修真書太閤記十一編卷之十終

重修真書太閤記十一編卷之十一

羽柴筑前守利家變の事

并松枝勢坂本合戦乃事

上杉彈正大弼景勝真田安房守昌幸の城下をとを
さぐはがた多入山道を志のび通り剩へ藤田能登
守の手入て千曲川の川添ある在家を焼たりか
ども猶昌幸の心中をうかひ不快日ごろみま
たふす羽柴筑前守の耳入しか筑前守眉を
ひそめ此とたやをきふ似て大い難し利家北陸道
の大將軍たり我麾下左やうの事出さるる後日

入殿下より御沙汰ありてハ我越度かるへーとて
先真田をよびよせ如何なるハ九様の結構よ及び
しごと尋ねたまふ昌幸さらば存せしむと申ふ
より能々是を穿議せしめ昌幸信之出陣の跡み
與三郎幸村うせーと聞え昌幸更ニ上杉ノ意趣
かき旨誓言を以て申けるみよりけらば景勝の心
中をきくへーと直江山城守を呼とるこれを
きくみ兼續謹て申けるやう山道を志のひ通
ハ景勝みれし何者存せしめ景勝ハ藤田より
一日をくまて千曲川漆の小道より押てしと申ふ
よりけらば真田と何の意趣あるへりら尋ねら

ゆみ更ニ遺恨あらばかき旨申ふより是す山
守み神文やせ利家後日の證據よあめつたま
ひ明ルハ三月二日碓氷峠を押下坂本に至りて
見たまへハ景勝の先手藤田能登守をき間ハ
陣を取たり夫よりきこ右の方みハ信列の三組
衆雁行よるかへを立て敵をよつ松枝の城みハ大
導寺駿河守政繁嫡子新四郎三千餘騎みく槍籠
寄手おそしと待しかとも北國勢坂本陣を取て
よせんともせしけりといつま敵を待へる
掛アて一搦よめと落せとる二千餘騎を勝て坂本
み馳むハハ真田安房守一番よかけをみて戦入

たろ 依田小笠原何れも真田ははるいゝ備を立る
真田の手の先陣伊勢崎藤右衛門望月宇右衛門森
山小左衛門大塚伴右衛門海野六郎兵衛我後ル
と名乗四尺五寸の太刀を以て打てやくは伊勢
崎叶るゝとくひきありぞく大導寺これをして
とや軍の勝たるそ進めくと味方を勇め依田の手
へきりやくは 大導寺の郎等小兒玉五郎左衛門鈴
木新左衛門三保崎九郎兵衛これらの數度の戦場
を歴しそのどもねはる面らふら切やくは勢
信濃勢こらへか孫きてよ崩れやくらんときふ時

藤田能登守松枝さく押行けるみより駿河守父
子忽まゝにれちり眼道より松枝へ引かへは藤田
の勢松枝城をよよせ竹東をほけて攻めはは
へ大導寺父子やう引かへ駿河守のからく
て城を入るかとも新四郎の入おくまを真田幸
村よ敵あつと目まかけをせむのし新四郎は孫
てより幸村との知人なり互に顔を見合せ莞尔と
笑みて戦ふほど幸村の郎等穴山小助望月宇右
衛門別府若狭おふく續いゝ駈けるを新四郎の
目みりかけは十文字の鎗を以て幸村の馬を志
たろみ突たアは馬志をりみ刎上りけるよ

幸村馬より落ちたりしか、あくろをうたる勇士おどすバ
 そのおど、かくへ下立たり其間、新四郎の城に
 入大尊寺の郎等山崎郷右衛門をせまゝり、真田は
 向ふ真田これを見ま推参ありまかり退けといふ
 おく、山崎は四尺五寸の太刀をかひくぐり、上帯
 入手をかけて曳やくと推合み処へ真田の侍別府
 若狭をせまゝり是れおかしく山崎は切やう終
 小郷右衛門を打ちけりかくて日既、黄昏、及
 ひしかば信濃衆の坂本は向て陣を取、越後勢の松
 枝を左みかゝ備を立けふ、如何みろ志々ん
 糟備後守、小荷駄の牛をねむく、真田は陣に馬入
 入

たつ真田の手の者とも是は甘糟、我等を侮めて
 態と牛を放ち、とおねえ、く入くを越後の武者
 ぶるかか如何きへをといふ、知へ甘糟、手の小者
 きく、牛を乞ふ真田、これを聞入を狼籍、おとて
 小者を散々、打擲、甘糟、これをきく、藤田は告て
 既、真田と、同士軍せんと、かゝけか、処へ下野佐野
 の天徳寺景勝の陣見舞、入來ありて、この事を聞
 去、おと、おど、から、拙僧、あひ、申へ、とて、真
 田、陣屋へ参向あり、真田、陣屋、入て、越後の牛
 を切殺さん、と、ま、お、お、何故
 ぶ牛を殺した、お、お、と、お、真田、兵士等、云々と

答ふ天徳寺きくたまひぢの怪敷からぬ所業かお
放ちし小者の油断より事起り放ちし牛は意に
それを殺してよし罪を清くはとていりし痛
ましからしやといふに真田も心解牛を殺
まを止まりしやともし一旦返をよといひ
る牛を又何といひ返をへやと思案しけるを
見て與三郎幸村おとそ易とあはれ天徳寺は頼
こ奉るへし真田はひけみあらぬや御計ひはへ
かといひしは天徳寺いりし牛も心得るはぢ
おそ僧形似合乃事おとそ牛を率て甘糟陣所
へ行むるひ牛より下て備後守ふこの牛途中み

りらひはへとも僧のいらさふ牛あり買給ひへ
と申けしは備後守是は我等牛みよと申を天
徳寺御邊の牛は放し非むや放し牛の御邊
の牛みあらは是は我等牛ありといふ備後守然
に買へし牛の價何ぞいふ天徳寺柳一荷と云
備後守笑て柳二荷天徳寺と與えしは天徳寺悦
ひし柳二荷を夫みせし真田陣みしは牛
か柳み化てはといひしは真田大に感し天徳寺
の御法力おとみ尤として柳をひらき一睡の夢
蝸牛の首乃戦を忘しけり
羽柴筑前守利家使者を松枝に遣はし事

并大導寺新四郎夜討の事

羽柴筑前守利家より松枝城へ使者を遣り坂本
 表一戦の次第北國武士の目を驚し但し武士の
 精力を竭されゆへに御一分の忠勤に立申し早
 早此方へ御出あるべくに御本領の事いせく相
 違有よりくゆと申入れ駿河守使者に對面し
 弓矢取身のからひみゆへ坂本ふこの合戦に云
 みたらは尤不ども御賞美あるこそかへて不審
 存ふれその御方へ罷出ゆへに本領に相違あるま
 一との御意まことふ以て心得かくく北條一家
 いま滅亡仕らば關八外關白の御領もゆゆは

羽柴殿より本領安堵をへきみあらは無益の事を
 仰られんよりそや御寄りて年來貯え以上列鍛治
 のさくひたる鍔を以て御具足を御試ゆへと返答
 けしむに筑前守使者案に相違し引かへし
 くと筑前守に申入れしに筑前守何様一應みくる
 渡をよし然かから終みの取べきものをといひて
 笑ふ明ルハ八日の巳刻に上杉勢の山の手より安
 中口へむるひ備を立ルに加賀勢の搦手へまわり
 本丸の山崎を旋りて陣をとけかへ關白の
 使者到着して松枝城より軍をもちむへしと下知
 ありけしむに總軍一同みおしよせ攻けれとむ要害

よけ止の容易に攻入かく城の中よりいさひしく
鉄炮を打つて防ぎけるより寄手もたやましく
おのろけ急々攻たらは味方死多かるへ！
と評定し持場を引わけ遠巻きあつりけるを大
導寺新四郎とくと見まよし山前八郎右衛門五郎村
上七左衛門戸根川龜之助江戸崎六郎左衛門塩川
伴藏鎌洲仙之丞奥市兵衛春日井忠四郎以下三百
餘人をまぐり十六日の夜草木もみおる丑の刻安
中曲輪より押つて上杉景勝の先手藤田能登守
陣へ切て入縦横十文字へ走り廻りかけたていか
ばさきとの藤田も夏目も持あまし左右へまのこ

散亂しけれは次の次なる羽柴の陣へ切つて是
をい煽と駈やふり手軽く人数を引上たる新四郎
は武者ふりを感じぬのこそあかりけれ今夜の
軍は上杉方三百餘人戦死し手負へ二百餘人羽柴
の手は八十餘人討れ五十餘人の痛手おつかくて
真田安房守上杉羽柴と評議して此城を押し置箕輪
厩橋を責落をへしと云けるを何れ尤と同心し仕
寄を付て松枝をおさへ置上杉勢の厩橋もむらひ
加列勢と信列勢のさへ向ひけり爰は治田の
城代猪股能登守を我楚忽よりかくは事みありし
かとの片山蔭から治田もあるへきよあらはとて

安房守氏郡の居城鉢形よりきて去也を成る
 流布本入猪股蓑輪より来て蓑輪の城代内藤大
 和守の手より加ちりけるが真田の手よりむらひ伊
 勢崎藤三郎より生捕れ磔せらばし由を記を誤
 あり鉢形城の条より辨き
 加列勢信州勢一万八千餘人蓑輪よりおしよせ短兵
 急に攻たてける中より加列勢の先陣長九郎左衛
 門尉自身諸軍より先立ち攻りかへ城中より長谷
 川伊織と名乗九郎左衛門尉を向けけて打ちか
 長の大長刀を氷車より廻り八方無碍に切て廻るを
 長谷川伊織の片鎌の鎗を以て掛倒さんと六七十

合り戦ひけるも長も長谷川も寄合ていせや組ん
 と組合て志よりり合けるも長も力や勝てけん
 長谷川を引搔んで味方の陣へ投入しかへ大勢折
 合おこしり立以首を取是をえり真田與三郎幸村
 元山小助伊勢崎藤三郎別府若狭守大塚伴右衛門
 等を引具り蓑輪の城より搦手より乗入所々へ火を
 かけし不ども内藤大和守今叶しと城をこり
 して落しけり又上杉勢の厩橋の城より押よせ十重
 廿重より取圍んでこれを攻けるも城の平城より
 實も浅まよるりかといひくようかいできり
 けん援兵の人数幾千万といふとを知ら山々峯々

不充滿了たりし上杉勢以の不ふ肝をつぶ
 是の如何ふと猶豫を所処を見まよし城中より
 切ていざしかの寄手せんぐふ敗走し利根川に追
 せめられ命を落さそのかむをしりし城中の兵士
 の程よく軍して人数を引上木戸をやくめたりか
 くの如きと既は兩三度及びし越後勢よも
 も不思議におゆしこの城名城とい聞かると分内
 せまく要害よしといふへりし然るもこの兩三
 度の合戦は味方いつら打負しとあまの不思議
 あり誰ある此城の始末を尋て見よやといひけ
 ば真江山城守とて出て申やう當城とてめい

笠間明玄入道の城みていひしを長尾左衛門入道
 固山宗賢取て居城とありその子左衛門入道道安
 之の子但馬守照景入道道賢その子弾正忠景業入
 道謙忠まゝ住せしを往永禄六年と覺えし故殿謙
 忠を謙忠入道を手親切ころしたまひその跡は北
 條安藝守を置たまひし安藝守死してのち北條
 丹後守をさし置けり天正七年小田原の持と
 あり又甲列のをちとあり同十年三月澗川左近將
 監居城とありのり三月ふして同六月
 ハ京都へ逃のりたるふより再度小田原の持と
 ありくひなり永禄五年より今年まで廿九年と存

大層言二終考一
いふ城主六人よ何ぞ本丸に怪敷墓のいよ
なりし變じし事おぼくいと申志りの上杉勢一同
み今一度手まげく攻て見ゆもやと望けふよ
何ぞぬ志りはへいと追手からめて牒合せ
既打立んとせし如へ羽柴筑前守真田安房守兼
輪の城を攻おとすその勢よよりて追々馳來り
上杉勢を援けし上杉勢いよ氣力をまして
只今厩橋を攻落さんと勇まきくける処は城中
よりも関を合せ鉄炮をうち出し嚴重に防戦しけ
るに此間みすたり朝霧の晴間より足つせハ
城中新手加とつと出不く昨日までハえり

ける旗馬印いくかきさる風よかびきておひたし
され共引かへきまみあらぬ楯を突からへ竹
東を着て寄かけ攻つけし如何なるとみや楯も
竹東も丸へかへふ右へかびる爰ぞといふべ
正体なく鉄炮は玉をこむしの薬をけしれ弓を引
んとまじれハ弦を弛矢落たりこれハ不思議と薬を
こめかへ張替の弓をとりて立ちへハ眼前よ白
霧たむひりりて目當を失ふ上杉勢あまりの
とよあをれきて志す猶豫しける処へ何處より
何人の勢といふと知されとも九三四万もゐる
へ旗六七十流おしたる上杉勢加列勢の跡を

大層言二終考一

一

取らんとおし寄たりさしもの藤田能登守甘槽
 備後守も仰天し此邊みか不との大名あるへしと
 もお不えいいうかる人のよきかからん敵味方
 か見て参れとく存候をいしきらは使番の侍六
 七人馳むうひよくく見せはいげせも三麟の旗
 おしたく關東みあるとあらぬ二巴三巴三引引
 二つ引月又星まぐのちね九曜みはかき馬何と
 も十流廿流その勢およそ六七万も出るべしぞ見
 えくく猶も實否を見定んと近よれハ霧立おし
 る物のあひろをえりけくし存候の使番引返さ
 んとかしけるみ忽ち方前をうしかひおもひもよ

らぬ山かけへ乗つけたり然も有へきみあら
 糸ハ在家入る處をとみあく赤城の山の東
 形といふ厩橋へハ何処へやつて行へきそと
 尋ねせハ厩橋までハ九六七里も隔のらんといふ
 みより夫より道を求めよりし厩橋へ乗かへし
 ハ城兵はよくふせき寄手をこへる難義ある処へ
 誰とハあらし加勢の兵士三四万幾手も勢を引
 分け寄手のうしを立きて攻たかみ不どみ
 上杉勢加列勢信列勢前後の敵をあしつほとく
 あんふをよひける体をく城の中よりきぐりたる
 精兵三千餘騎百もふらけりてかくは上杉勢踏

とくまのりく軍せんとまれの援兵のそのどもち
まのり上杉勢のかけあらべたる役所陣屋へ火を
かけしり。餘烟天をまがして焼のなるほどみ味方
むせかへうく目もあかきを利根川さして引かへ
しけるそのり。實正のわたりみせかまき。命を落し
まら廣瀬川のまのり。そのり。走るもの。浅瀬は
ひらりて多くい。溺れ死したりけり。藤田能登守お
どり上りく口をさかか。まのり。只事もあるへ。あら
ま。必定鬼神の所為あらんけり。とてこの大軍も
攻かり。これらどの小城一のを落し。かぬること
あまうといへ。残念あり。いづれまも。明日へ。攻支

度をかへ。是非。攻落し。申へ。但し。手負。戦死を。吟
味し。勲功。あるもの。と。功。あきら。ものを。正。まへ。と。
いひ。つ。見る。み。只。今。まで。深。手。負。し。と。見。し。その。ま。
疵。を。こ。し。る。形。く。ま。ら。の。戦。死。せ。し。と。い。ひ。ひ。る。も。た。
惘。然。と。酒。を。酔。し。心。地。し。て。あ。り。ける。ぞ。ふ。し。と。云。
も。何。より。あり。

重修真書太閤記十一編卷之十一終

重修真書太閤記十一編卷之十二

厩橋城寄手難戰乃事

并分福茶釜の事

厩橋の寄手上杉勢加列勢信濃の三組衆いつれも
 究竟の剛將おまのその下みたつ侍大将のいふよ
 をよむ以諸士足輕雜兵み至るまで尋常あらぬ物
 のく形りける。城みむらひて攻れり。いつも敗走
 一度も勝を取しと好く。志々のみから以戦死せ
 くと見し。酒は酔し如く。手負しとおもひし。更
 み疵おかりけむ。是のまさしく變化のわざある

へし。ちりころ。弓矢取の鬼神。狐狸ふたふらかされ
しと。餘りといへり。口惜やこの上の焼草をおめめ
四方より。一時は火をかけ焼不ろほをべしと評定
一決し。在家を壊ち堀を打あきそのうへに柴を積
枯草を集め。既又火をかけたとき。ふあり城中の水
門より。瀧の如く大水涌いて。柴も枯草も。忽ちお
あふし。結句餘る水。寄手の陣中をひたしけるふ
より。兵糧も玉薬も。まへく水中の藻屑とありふく
又上杉勢加列勢いひ。ま顔を見合せ。是をわつら
る。小城のうちより。是不どの水のいづは。と餘り
不思議ぬつと。打寄く。考ふると。いへとも。さら

如斯へしといふ人も。ぬし去り。火矢を射よやと云
ふと。おそ。何れ。銘々の陣々より。五人七人立あらび
る。射ちりけるう。その矢城中に達るや。いかや。その
火消て。更な。燃あから。是も。詮あ。さて。如何を
へきや。といふ。処へ。直江。下知とて。此邊の百姓の
うち。老たるもの。三四十人。出さ。り。か。これを
呼居。その方と。り。此地の故老。あるへし。まら。は
この。厩橋。城中。ふ。何そ。あや。し。事の有ひるを。知た
るや。語を。聞んと。い。ける時。一人の老人。ま。く。出
て。某。その。事。或。委細。を。申上んと。申よ。より。其。どの。を
かり。残し。外の。者。ふ。相應。を。物。と。ら。せて。是。を。返

そのうち其老人を上杉の本陣へめしむるその間
傳へし咄をかくれとありけしその老人かゝと
あり申やう當城主北條丹波守の次男當國邑樂郡
館林堀工村に茂林寺といふ禪寺の住職とありて
まかりありしその茂林寺に幾千年を經てやその
歴年を知らぬ狸あり誠ニ神通自在を得たり去年
當城の二の丸に火災ありける時いづくより來
りけん數百人の人足いづくより火をふせぐこと
勿々人間わざと出もれを火志のまりてのち
その者ともを呼あちのけ何処より來りやと問
ひ館林より來るといふ厩橋より館林まで十餘里

の行程に瞬息の間なきとありとあるといへり
不思議なるといへり館林の百姓共とめて心付
何ぞとわむ農業のため田にいづくありや
誰いふとなく火事あり火事ありといふより家
み立かたり棒さす火消の具をたつや何とも
あらは只走りよ走りよへむかみ小畑の立の不
る成見定めまきや彼處よりややくれと打より
うちより消苗見ゆへり何ぞ厩橋入ては我々
か住處よりいふかりの道を経てはよまこも疲
れしをいふは是の正に茂林寺の古狸に知せ
し神通力といふと申せしこの事を以

て考へしへび今度の奇怪もこの古狸かるへく存
ゆと申ふより上杉も藤田も尤やうの事も有ら
ん老人大義なりとて相應は錢とらせて返したる
その跡みて藤田能登守實は百姓なり彼等心は
怖るるよりあのやうの事を申たり甲曹して刀
劍をとる殺氣凛々たる兵士の何とて狐狸はあざ
むかひんやと云て大に笑へり甘糟備後守かくて
らよりいや尤やうみいふはか殷の姐己周の褒
姒我邦の玉藻の前の例も有り畜生の身として十
善万乗乃帝王を惑はせておのりて折す人智
の及もはる処ありそれのやて置その茂林寺守

鶴といふ鑑司の事を幼稚の時よとてとあるか
たうて聞せんをたまへその茂林寺の開山を大
林正通和尚といふ應永年中の人なる伊香保の
温泉は湯治しける時一人の老僧大林和尚の次の
間も宿かりくある温泉も同く入かるとい
ひし心易く語らひかれけりその老僧雞を愛
するところをさぐりあるとき大林和尚老僧は何處
の人なるやと問は其僧は西國のゆのり名
を守鶴といふ諸國修行の志ありとも老脚心は任
せし和尚願はくは我をして薪水の勞をさせせ
まへ禪室も侍して佛心を會せんといふ大林和尚

その非常のその形を成知てこれを許し共ニ館林
入至りける時守鶴一處をせし浄地あり佛寺と
まへしといふ大林和尚をふりその処に寺を草
創し茂林寺と號し青龍山といふ守鶴納所とあり
大衆の草鞋を世話しけるみ不日みして結衆十人
みをよみ守鶴一川の罐子あり終日茶を煮て數十
百人み與みると云とも茶の竭るに形し人をを
たるを奇と云ふはま大林正通和尚遷化して
後ハ守鶴二世和尚より從て元の如く納所を勤たり
二世和尚より遷化し三世四世五世六世七世八世九
世を歴て十世よりはま納所たり十世和尚ハ

まかちちこの城主の次男なりよつて近隣よんで
茂林鑑司守鶴とよぶ天正七年この寺ハ江湖あり
諸國よりあひまは処の僧千人みをよぶ十世和尚
いらく江湖の結衆多くして茶の間乃釜少き大
かる成かみべしといふ守鶴よりこの茶釜少き
けれとも江湖の衆は茶をおぢ人はみさし支那
といふく買もとめを和尚あり治みハ服さくれと
も老僧のいふとぬりそのまよみかし置けるも果
し千餘人の僧乃唇をうはちしきこも乏し
き成おなえし守鶴いらくこの茶釜その人多けれ
ハ多きみ供みへしその人少あけしハ少きみ供み

その分よあつてかつその福ありよつて分福の茶
 釜といふと云て大に笑ふこれよりこの茶釜を分
 福茶釜といふ同十五年二月廿八日村人ありまり
 て守鶴を精齋に招き精齋の後酒をまき守鶴
 大よよろあび天上の甘露仙掌の水もこれみはい
 かく増るへきと舌鼓うちてそれを飲よき元氣ふ
 る寺へかつりそのれの部屋にのりてそのまゝ打
 卧前後もあらは折ふ一日おろく湯やまき出入
 まは盲人きこる守鶴をたづねれば雑僧へま部
 屋よあつて眠れつといふ盲人部屋よ入る探れり
 守鶴みあらは總身毛あつて人とおりてれを盲人

いづれ和尚よかへは和尚もまゝいつて見るよ盲
 人のいふごとく和尚さらし動せは我室よかつり侍
 者以下みかへはやう守鶴をてみ開山より以來十
 世の納所あり長壽りかきりあるものあり不思議
 乃僧とおひひしむぞとて古狸なるなまるとも十
 世の納所ありてその忠貞人類かへけりまづべし
 けらみ心付し体よあまかかれといふ処へ守鶴出
 来り精齋の後乃一盃ふ十分の酔をかもよおとみ
 刀利天上乃快樂をかしたつといつて大に喜ひ其
 のち我當寺を去へる期いつたり残りおやとい
 ふ和尚以下さかいてそ猶當寺よ止住して長く

納所の務をたまけたまへといへり守鶴我この寺
 をいづさほ王をかあしむの各々百倍せり然ル
 とも我爰に住へきみあらべといふ和尚そり
 年歴幾許を経たまひといへり能ぞ尋孫玉つり
 我印度に住と五百年震且よりて一千餘年を
 經皇朝ふそりて秦の徐福と同船したまへり今
 よりり一千八百餘年ふをよぶ只今當寺を出さる
 名残は釋尊說法の体をま孫び見まへといふ
 とおのへり忽は沙羅雙樹の寶林と名づり幾十百億
 萬の四衆圍繞渴仰せりやい金色の釋尊微妙の
 御聲ふて華嚴方等般若涅槃乃体相を現し終り

源平の軍を学ひ見せんとて守鶴座を起り只今ま
 て寶林と見えり漫々たる大海と名づり重閣玉座
 と見えり峨々たる絶壁とへんし白旗天とひるか
 へり赤旗船と名づり鯨波の聲天地をひび
 き射合を矢さびの音うち合は太刀の鏗音おそ
 ろいかんといはるる形と人おもはるるあそ云
 る感歎まほその間は何處ゆきけんかいくれ見え
 以てのち一翼の白鶴をりて寺中におあそふ又
 よく人子馴たりこれかからん守鶴からんと申せ
 ありき自在神通の古狸かまへ今ま城主を
 援けしからんと語りけれりさもあらんといふ人

も多かりあり

茂林寺御朱印二十三石四斗・邑樂郡青柳村の内あり・當寺草創應永廿二年といふ・輪次直堂終而復始といふ・二行八字の額あり・横一尺長一尺五寸・これ守鶴の書なり・また明の錢舜拳の花鳥唐宙の山水・禅月の蘆葉達磨張思恭の十一面觀世音周文の虎顔輝の福祿壽かとあり

厩橋城主降参の事

年夏目舍人助乃事

上杉勢加列勢信列衆追手搦手より厩橋城を攻る

とよ勝利を得しと脱けきとも手負死人のあらず不思議ありと評論しける処へ在地の故老茂林寺の故事をかくすかゝりてめて彼奴も通力よとてかくしは目よあいにとを悟り如斯てハ軍の方便を得たりと直に打立十重廿重みとりかたき是を攻りかとも城際よりははとよ白霧暝々たるを前日のとよ然るみ城中より使者をとりていそ弓矢取身のからひかれハ一旦御勢よむらひ軍にてはひし形ととも北條家の武運をてみやくむき小田原の滅亡もや三四月の間みはれハ當城いろみ堅固よ持あへはとも本原たる小田原の

落去らくきよのしんのしん何とら仕しべべよりて城を御渡
し申へくは但たゞ籠城の兵士等若干いくばくへと御大
將の御遣ごんづひやうふよりて御手ごてを就つてなを申へ
是等これらを御殺ごころしおされはしんと實じつは不便ふびんなしと申
けしの上杉勢の内より御降参ごこうさんのよし尤なほおしえ
は早々城を御渡ごんづし去いおしべくは籠城の兵士の
としららよよ以て別儀べつぎあるままくは先手せんてみ加からら是
より前々ぜんぜんの城共じやうきを論ろん味方あひとあたままふへくは
たゞ一城主いちじやうしゆの何なにとあされはやと問とけしば城主じやうしゆの
このゆへへ相果あひくはといふ上杉かみももおしひの不ふう
のしおしのし換使かへしを遣つてし城じやうをうけしとら丹波守たんばしゆの

柩こをあらため籠城ろうじやうの兵士へいしを隊たい々々ををひきけ先手
み加かららそのし上杉かみ勢せい加列勢かれつせい信列衆しんれつしゆ三組さんぐみの
軍勢ぐんせいより直ちか利根川りねがわを打うけし鳥川とりがわををらら
あら甘樂郡かんらくぐん小幡こはたの城じやうを攻せめしはら武田たけだの幕まくら
下くだりけし小幡尾張守こはたおしの子息こしよ上總介かみともせ信貞しんてい城じやうか
は信貞しんていの舎弟せち播磨守はりまし昌高まさたかと共とも小田原おだわらに籠城ろうじやうし
當城たうじやうにに信貞しんていの弟せち彦三郎ひこざぶらうを大将だいじやうとして家
老かろう小幡こはた帯刀たいてう丹羽に彌や九衛門尉くゑもんゑい以下いげ二百餘騎にひやくじゆき入いりし楯
出でりし上杉かみ勢せいの先手せんて藤田能登守ふじたのうのり信吉しんきちは此
邊あたの案内者あんないしやおしのし三千餘騎さんぜんじゆき入いりし宮崎みやざきの砦とりでより取
かけし換使かへしのし木戸源助きとげんすけ方かたよりしかしこの小幡

帯刀といふものハ元來沼田のらまれみして藤田
ろ手みあつちりめのかはらへ夏目舎人助とい一方
からぬ由緒あり内色ハ舎人ろ才覚みて帯刀をえ
かりてええやと藤田みかくれハ藤田左と同心一
けはよより舎人ろ侍ろ天野治右衛門といふもの
を志のひて柵の際よりちよせ伺をせし折しん
夜まろろ乃めの來つちハそれハ金錢をあつえ
ぢれろハ帯刀と断金の友形ろ志ろはみ今敵味
方と分きていそのいふとろたがひハ遠慮あり今
宵ひそかハ面會したさよあつちよ來つちろと云
夜廻りの下部金錢をりらひしうれしよまそれハ

某ろ主みろハ只今申通しハへし志ろしあつちま
へといひつゝ内よりつて斯と告れハ帯刀その天
野ハ年來の懇志ありといひつゝ立いで柵ありし
面會とそものとき治右衛門申けふハいうま小幡殿
關白殿下の副將軍羽柴筑前守利家をよひ上杉彈
正大弼景勝の勢を以て攻めし不どま松枝蓑輪
沼田廐橋をへて降参したふ処ま小幡一城のこた
しかま守りてせんまよみろハかハへし然るま
上杉方の評定入南牧西牧の谷みハそろし勢
も忍えし妻子人質をかりと忍えし宮崎みハ侍
多くあつちりし体かれハ宮崎を押え置直まかの谷

へおしよせ人々の妻子を生とらんとしつくりわさ
御邊と年來の懇意ゆへ此を法ぐは形う用心あ
るへしといひいかり帯刀去りかくしけふ内意
かふたとへ千騎万騎の加勢入り増しては悦
びそれより俄に宮崎入居たふ侍とを多く南牧
西牧の谷へさし加えし宮崎のまこと入空城
みかりみたり天野とて定かへりかくと告ぐか
藤田能登守大よろあひその夜の明るとまぢ寅
卯刻みくやうち立宮崎の邊みそかへを立たり
かゝ舎人助ふくび天野を以て帯刀はいをけ
はひ只今きくいごとては景勝旗本を以て南牧西

牧みうちやく短兵急攻ぬらんとかうしよ
形勢ハ目よあまは大勢形う城の落んと疑ひか
いさきこの岩より御加勢あるへくはこの邊み
ハ寄手といふもの一人も見えぬと申けふを小
幡帯刀あはれあさくも誠とおひ西の城戸を開
き南牧さして馳たりなり三四町りまぎぬらん
とおひ小ころ舎人助時分ハよしと藤田入法げ
かゝ藤田下知して村上源五り勢七百餘人を真丸
ふさかへ東のかくしよ関波をあげき真一文字
宮崎よせめかくは藤田能登守ハ千餘人入て南の
方へを廻り宮崎の虎口よむか入て攻のなり

ところやく處々へ・火箭を射たせり・かけおらへたる・役
 所く・み燃つぎ・たちまち・黒烟天を去がして・焼き
 ころ・若みのあま〜そのとてハ・行歩りかかぬ老
 人ま〜ハ・幼稚のその・はくハ・女童のまかハ・以の
 ころみ・周章したちまちま・城に落たりけり・帯刀ハ
 鯨波の聲みたどろろさふり返りしハ・宮崎のやく
 みあ〜して・焼亡あつ・何事みやとおりハ・城よ
 り落さ〜して・そのとも・追々み上杉勢若又亂入せ
 ーよ〜を注進しけしハ・はくハ・天野めみ・謀られー
 ー口惜やと悔めとも・せんやくかー・爰は誰とハ知
 以宮崎みのあつ〜侍年の不ど十四五とみえゆる

どの小具足して・弓矢をもち・堀みの不りて・寄手を
 射たりけるり・小腕かよとも・あ〜はら細かよ・透り
 とも・深し・矢みハミ・廿餘人を射たぬ〜そのち太
 刀を抜て大勢み〜し〜や〜五六人を切倒して
 終り行方〜らと落失たり

重修真書太閤記十一編卷之十二終

